

やれやれ「冷温停止‘状態’」詐欺で恥じの上塗り！

ドジョウ ～野田首相の「収束宣言」に海外や専門家から異論・不信感が噴出！～

首相が原発事故にかかわる記者会見をするというのでテレビで見えていたが、途中から眠ってしまった。仕事の疲れもあったのだが、あまりにも軽薄で恥ずかしい内容を延々と誇らしげに語る姿を見ているうちに、怒り→あきらめ→疲れ、そして「睡眠停止状態」になってしまった。一国の首相がかくもいい加減な内容を宣言して、根拠のない安心をふりまくとしたら、「おれおれ詐欺」と大差はない。害毒であり国益を損なうことになる。何より汚染地帯に放置されている子どもたちの緊急避難と逆行する方向に政治が走り出すための「号砲」だとしたら、犯罪である。案の定、海外メディアやめずらしく日本のメディアからも一斉に疑問視する批判が相次いだ。野田首相や経産省が何をどう計算したのかわからないが、自らの政治生命を縮めたことは確かだ。しかし、被災者の命まで縮められたのではかなわない。

【社説】事故収束宣言 幕引きとはあきれ返る 2011年12月17日 中日新聞

福島第一原発の「事故収束」を野田佳彦首相が宣言した。放射性物質の放出や汚染水の懸念も残り、絶対安全の保証はどこにもない。廃炉までの長き道のりを考えれば、幕引きとはあきれ返る。

「原子炉は冷温停止状態に達し、事故そのものが収束に至った」と述べた野田首相の言葉に誰も耳を疑ったことだろう。原発建屋内ではいまだに高い放射線量が計測され、人が立ち入れない場所もある。さっそく現場作業員から「政府はウソばかり」と批判の声が上がったほどだ。

そもそも「冷温停止」という言葉は正常運転の原発で用いられる。「状態」というあいまいな文字を付けて宣言にこだわる姿勢は、幕引きありきの政治的な思惑からだろう。廃炉へ進める節目とすることや、「いつ戻れるのか」という避難住民を少しでも安心させようという狙いがある。全国の原発の再稼働はむろん、世界へ原発輸出を進める意図もうかがえる。

だが、福島第一原発は「収束」どころか、溶け出した核燃料が格納容器内でどうなっているかもつかめず、ただ水を注ぎ込み、冷却しているにすぎない。循環注水冷却システムが正常に機能すればいいが、大きな地震が襲えば、再び不安定化する心配はつきまとう。綱渡り状態なのが現状ではなからうか。

放射能汚染水処理も難題だ。建屋への一日四百トンもの地下水流入は続いており、保管タンクはいずれ満杯になる。むろん海への放出など、漁業者や国際的反発などから安易に考えるべきでない。

廃炉となると、核燃料取り出しに「十年以内」、炉の解体など最終的に「三十年以上」かかる見通しだ。その過程で放射能漏れなどの事故が起きる可能性がある。要するに課題山積なのだ。

原発から半径二十キロ圏内の警戒区域と北西に延びる計画的避難区域を新たに三つの区域に再編する予定だ。年間放射線量が二〇ミリシーベルト未満を「解除準備区域」、二〇ミリシーベルトから五〇ミリシーベルトを「居住制限区域」、五〇ミリシーベルト以上を「長期帰還困難区域」に分ける。

「解除準備区域」では除染とともに住民が戻れるようにするというのが、子育て世代が安心して帰還できるだろうか。社会インフラの機能回復も見通せないままだ。

収束宣言の内実は、原発事故の未知領域に足を踏み入れる「幕開け」といった方がいい。

事故原発の状態を最も良く知るのは日々、現場で作業に当たっている人たちだ。彼らは次のように言っている。

現場作業員の声 ～東京新聞より～

- 言っている意味が理解できない、
- ろくに建屋にも入れずどう核燃料を取り出すかも分からないのに
- 俺は日本語の意味がわからなくなったのか。言っていることがわからない。毎日見ている原発の状態からみてあり得ない。これから何十年もかかるのに、何を焦って年内にこだわったのか
- 本当かよ、と思った。収束のわけがない。今は大量の汚染水を生みだしながら、核燃料を冷やしているから温度が保たれているだけ。安定状態とは程遠い
- どう理解しているのか分からない。収束作業はこれから。今も被ばくと闘いながら作業をしている。
- また地震が起きたり、冷やせなくなったら終わり。核燃料が取り出せる状況でもない。大量のゴミはどうするのか。状況を軽く見ているとしか思えない
- 政府はウソばかりだ。誰が核燃料を取り出しに行くのか。被害は甚大なのに、たいしたことないように言って。本当の状況をなぜ言わないのかと話した。

流出する福島県民、6万251人が他県へ！

～「避難」「放射能」を口にできないほどの不信感が蔓延するいたたまれない現状～

福島県の佐藤知事の懸命な慰留作戦？にもかかわらず福島県から脱出する人々が後をたたない。6月16日の時点で60,251人の人が福島県から他県に避難したことになっている。福島県内の避難（福島県内の他の市町村へ避難）は、このおよそ1.5倍程度だということだ。

野菜・コメの根拠不明の「安全宣言」や、汚染地帯でのスポーツイベント強行開催、音楽コンサート、ファッション・ショーなど、現実を直視できない迷走行政を続けている福島県と佐藤知事。しかし、脱出は止まらない。

驚いたことに佐藤知事は、他の都道府県に対して12月末で「県外への自主避難者の受け入れ停止の要請」をする暴挙？に打って出た。しかし、内外から厳しい批判が噴出しすぎさま撤回する失態を演じた。他県に避難した人たちのために開かれたシンポジウムに寄せられた避難者の生の声に、現状の福島県の実態を垣間見ることができる。

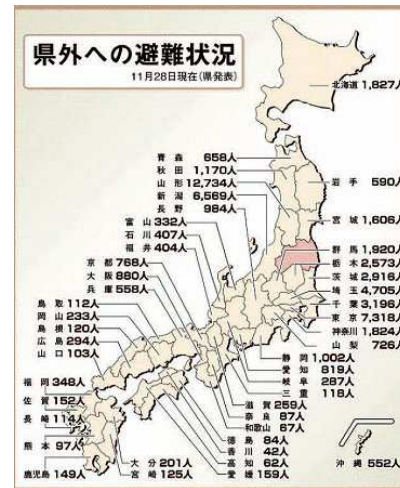
国や県の政策の誤りから、ずたずたになってしまった深刻な福島県の現状が見える。

12月3日大阪弁護士会シンポジウム ～ 避難者発言補充資料より ～

1. 町はなにも変わっていないのに電気が消えている家が多く、ゴースタウン化して明らかに人がいなくなっていた。テレビに映っているのは、あえて人がたくさん住んでいるかのように見せている所を映している。現地はもともと過疎化していたうえに、さらに過疎が進み、町としての存在感はすでに失われている。もう二度と住めないのだと実感してショックを受けた。
2. ボランティアなどから支援物資が到着すると、引きこもっていた住民が出てきて支援物資を受けとり、いそいそとまた戻っていくのに会話がない。明るさが消え、おたがいに無口で口を閉ざしている。住民はとげとげしく気がいらだって変わってしまったように感じる。
3. 避難者が安全宣言の出た南相馬市へ戻ってみても、かつての住民同士の交流が失われてしまった。一度でも避難してしまってもう元の住民に話しかけても答えはそっけない。もう二度と戻れないと感じるほどの疎外感を受けた。私たちは老人で、事態が落ち着けば福島に帰れると思っていたが、その1%ほどの希望さえ失われた。二度と戻って住むことはできないと感じた。
4. 福島では住民が放射性物質についての単語をあえて口にしない。こわくて口にさせないのか、何なのかがわからない。こんなに危険にさらされていて現実的に考えなければいけないのに、誰もそれを口にせず、まるで何もなかったかのように住んでいる。関西へ避難している自分から見れば、「放射能」をタブー視するなんて自分の命を守ろうとしていないように見える。本当ににも考えていないとしたらこわい。小さな子どもを連れて避難した人は多いが、将来子どもを産み出す十代や二十代の若者が無関心で「考えすぎ」だと嘲笑していることが信じられなかった。彼らも早急に移住しなくてはいけないと思う。安全宣言を出してしまったために起こっている現象ではないのか。(茨城、千葉、東京からの避難者も同様の回答)
5. 旧ソ連は除染をしていない。国民の税金を大量に除染に費やさず、疎開や移住への政策をすぐに始めるべきだと思うが、大楯町の選挙では「疎開を他府県にお願いしたい」と立候補していた人が惨敗した。東電の社員が一生懸命対抗馬に投票(運動)していると地元で話題になっていた。
6. 福島県庁に勤務する人は山形県へ避難させて、山形県から出勤している。福島はあぶないと知っていてもそれを口にできないが、態度ではそう示している。

国会質疑で取りあげられた県外避難者の声からも深刻な断裂が起きていることが見える。

『国が安全だと言うのに、それをきけないのか』『自分が安全な場所に避難しておいて、除染してきれいになった福島に帰ってくるつもりなのか』『いいよねえ、あなたたちは逃げられて』。……言葉がない。



「福島県から県外への避難状況マップ」。数字は、平成23年11月16日調査時点のもの。

